甲虫コレクションガイド 10
豊橋市自然史博物館の甲虫コレクション

長谷川道明
〒 441-3147　豊橋市大岩町字大穴 1-238　豊橋市自然史博物館

Beetle Collection of the Toyohashi Museum of Natural History

Michiaki Hasegawa

はじめに

豊橋市自然史博物館は，「生物の進化」と「郷土の自然」を主テーマに 1988 年 5 月 1 日に開館し，2018 年で 30 周年を迎える．設立の経緯は，当時日本にほとんどなかった実物の恐竜全身骨格アナトサウルス・アネクテンス（現在の属はエドモントサウルス）を，豊橋市と友好提携をしていたアメリカのデンバー自然史博物館（現・デンバー自然科学博物館 Denver Museum of Nature & Science）から購入したことが契機で，現在まで恐竜を中心に，古生物の展示が充実している．

昆虫コレクションの構築は，筆者が赴任した 1990 年より本格的に始まり，2017 年 3 月末集計での収蔵点数は，233,173 点である．

昆虫コレクションは，全体的にみると日本産のチョウ類とトンボ類が比較的充実している．特徴的なものでは，南山大学の阿江茂名誉教授が 50 年間にわたって遺伝・進化の研究のために行った，アゲハチョウ上科各種の種間・亜種間・地域個体群間などの交雑実験で得られた約 1 万点の雑種個体のコレクション，京都大学名誉教授の故・駒井卓博士が集団遺伝学の研究に使用したナミテントウの標本なども収蔵している．甲虫のコレクションは正確な点数を集計していないが，8 万点ほどで，分類群としてはクワガタムシ科の標本が最も充実している．

主な寄贈コレクション

1）穂積俊文コレクション

東海地方の甲虫相研究のパイオニアであった故・穂積俊文博士が収集されたコレクションで，愛知，岐阜，長野県産の甲虫標本約 25,000 点からなる．標本は穂積博士のライフワークとして名古屋昆虫同好会の機関紙『佳香蝶』に掲載された「東海甲虫誌」をはじめとする多くの記録や，『愛知県の昆虫 , 上』」（1991）に記録されたデータの証拠標本であり，愛知県の甲虫インベントリーの基礎標本ともいえるコレクションである（長谷川，2001）．

2）森部一雄コレクション

故・森部一雄博士が収集された約 25,000 点の昆虫コレクションで，約半数を甲虫が占める．森部博士は，日本人の海外渡航が困難であった 1960 年代から 1970 年代初頭にかけて，三井商船の船医として 55 ヵ国を巡られており，コレクションにはその折に寄港地や洋上で調査・採集をされた多数の外国産甲虫の標本が含まれている．日本産種は，名古屋市を中心とした東海地方産が中心で，1950 年代に名古屋市内で採集されたスジゲンゴロウやマダラシマゲンゴロウなどがある．森部コレクションに含まれる日本産の重要標本については，長谷川（2002）による報告がある．

3）吉田哲朗コレクション

春日井市在住の吉田哲朗氏が収集された約 18,000 点のコレクションで，愛知県尾張地方産の甲虫類を主体としているが，南西諸島やインドシナ，インドネシア等の外国産の甲虫類も多数含まれている．産地絶滅している名古屋市庄内川産のカワラハンミョウ，三重県産のキベリマルクビゴミムシなどが含まれている．

4）森　功一コレクション

名古屋市在住の森功一氏が収集寄贈された甲虫類を中心とした約 2 万点のコレクション．森氏は，上記の吉田哲朗氏と共にベトナム，ラオス，インドネシア等に採集に出かけており，東海地方産の甲虫類の他，これらの諸外国で採集された甲虫類が多数含まれる．吉田コレクションと森コレクションに含まれる重要標本については，長谷川（2017）による報告がある．

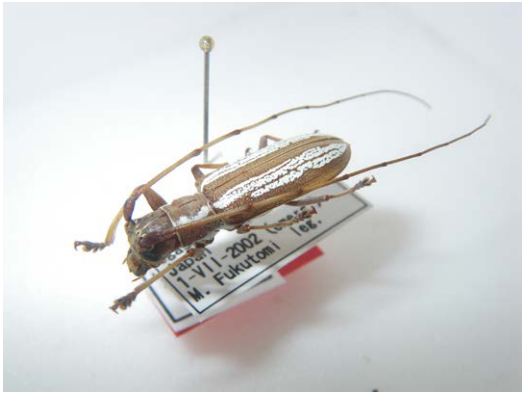

図1．オガサワラオオシロカミキリのホロタイプ標本．

図2．クワガタムシのコレクション．

図3．愛知県名古屋市庄内川産，美浜町内海産，三重県四日市産のカワラハンミョウ標本（すべての産地ですでに絶滅している）．

図4．愛知県各地産のスジゲンゴロウの標本．

特徴的なコレクション

1）タイプ標本

ホロタイプ 9 点，パラタイプ 108 点を収蔵している．ホロタイプはすべてカミキリムシ科で筆者が記載したものである（図 1）．パラタイプの内訳は，オサムシ科 40 点，ゲンゴロウ科 6 点，タマキノコムシ科 2 点，マルハナノミ科 10 点，コメツキムシ科 1 点，クワガタムシ科 38 点，センチコガネ科 1 点，コガネムシ科 6 点，カミキリムシ科 1 点，ハムシ科 3 点である．

2）クワガタムシ科のコレクション

1996 年に開催した特別企画展「魅惑の甲虫クワガタムシ」展を契機に本格的に収集を始め，現在約 400 種 5,000 点を収蔵している（図 2）．パラタイプ 38 点の他，現在では入手が困難になっているマルガタクワガタ属 *Colophon* やウケジママルバネクワガタ，野生絶滅している可能性の高い名古屋市周辺産のオオクワガタの野外採集標本の他，変わり種としてはノコギリクワガタの雌雄モザイク標本 2 点，性差を作る遺伝子の研究のために dsx 遺伝子の発現量を減少させ，雄とも雌ともつかない形態となったメタリフェルホソアカクワガタ *Cyclommatus metallifer* の標本（後藤寛貴博士提供）なども収蔵している．コレクションのうち，351 種 3,794 点については，目録が公表されている（長谷川 , 1998）．

3）東海地方の絶滅・絶滅危惧種の標本

上記で紹介した穂積コレクション，森部コレクション，吉田コレクション，森コレクションは，地域の甲虫相の解明を目的として戦前から多岐にわたる分類群について収集されており，現在東海地方で絶滅，あるいは絶滅危惧種となった種の標本が多数含まれている．代表的なものを以下に挙げると，カワラゴミムシ（名古屋市各地），カワラハンミョウ（名古屋市；内海町；祖父江町；三重県四日市市）（図 3），フタモンマルクビゴミムシ（名古屋市；三重県北勢町），キベリマルクビゴミムシ（名古屋市；瀬戸市；三重県北勢町），エチゴトックリゴミムシ（名古屋市），スジゲンゴロウ（名古屋市；瀬戸市；蒲郡市）（図 4），マダラシマゲンゴロウ（名古屋市），マルガタゲンゴロウ（名古屋市），クロゲンゴロウ（名古屋市），コガタノゲンゴロウ（名古屋市；蒲郡市），ナミゲンゴロウ（名古屋市），クロマダラタマムシ（名古屋市），オオクワガタ（名

古屋市；小牧市；春日井市），ヨツボシカミキリ（名古屋市），オオシロカミキリ（名古屋市）などがあり，かつては豊かであった愛知県周辺の自然環境の変遷を知ることができる貴重な標本群となっている．

コレクションの保存と利用

豊橋市自然史博物館では，寄贈を受けたコレクションについては，由来（寄贈元）が分かるように標本1点1点に「穂積コレクション」「森部コレクション」等のコレクションラベルをつけ，分類群ごとに整理している．オサムシ類のように地理的変異が顕著で，1種についての個体数が多くなるものについては，さらに産地ごとにまとめて整理して配架，収蔵している．ホロタイプについては，一般標本と分けて保存しているが，パラタイプについては基本的に上記の一般標本と同等に扱っている．

コレクションラベルの添付は，現在3名のボランティアが作業に当たり，配架は筆者が行っている（だだし，現在すべての分類群，寄贈コレクションの整理が終了しているわけではない）．

収蔵標本の調査，研究のための利用については，筆者までご連絡をいただきたい．また引用した文献のうち，豊橋市自然史博物館研究報告に掲載のものについては豊橋市自然史博物館のホームページ（http://www.toyohaku.gr.jp/sizensi/）でpdfを公開している．また「豊橋市自然史博物館資料集」については残部があるものについては提供できるので，希望者は筆者までご連絡いただきたい．

おわりに

以上，豊橋市自然史博物館の甲虫コレクションの概要について紹介させていただいた．甲虫コレクションは，当館が収蔵するチョウやトンボ類に比べると決して充実したものではなく，分野も偏っている．また地方の博物館が共通して抱える問題だと思われるが，収蔵スペース，標本箱や標本棚の不足，標本整理にかかる時間の確保が十分できない等の理由により，整理が行き届かないのが現状である．それでも，愛知県産を中心とした地域の絶滅標本を散逸することなく保管できていることなど，当館の果たしている役割は決して小さくないと自負している．

謝辞

当館に貴重な標本を寄贈していただいた方々，長年にわたって標本整理を手伝っていただいている豊橋市自然史博物館ボランティアの皆様に厚くお礼申し上げる．また，本稿の執筆を勧めていただいた本誌編集委員の奥島雄一博士（倉敷市立自然史博物館）に感謝の意を表したい．

引用文献

長谷川道明，1998．昆虫類Ⅰ，豊橋市自然史博物館所蔵クワタムシ科標本目録．豊橋市自然史博物館資料集第6号，43pp, 2pls.

長谷川道明，2001．穂積先生のコレクション．東海甲虫誌，穂積俊文博士記念論文集，pp. 365–368.

長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類．豊橋市自然史博物館研究報告，(12): 49–53.

長谷川道明，2017．豊橋市自然史博物館に新たに収蔵された東海地方産絶滅危惧甲虫の標本について．豊橋市自然史博物館研究報告，(27): 31–35.

（2018年2月7日受領，2018年3月2日受理）

【訂正】

本誌28号10–13ページの「山口県におけるキボシチビコツブゲンゴロウの初記録と若干の知見」において，本文中および付図タイトル中の植物名に以下の誤りがあったので訂正する．

誤）カナビキソウ
正）ネビキグサ（アンペライ）

（相本篤志　747-0806　防府市石が口3-10-10-2-B202）

【訂正】

本誌28号43~45頁に掲載の鈴木・岩田・南「富山県のオオサルハムシ — 附：本種の寄主植物に関する覚書 —」の45頁左上から12~14行目の「（現在，クサタチバナ *Vincetoxicum acuminatus* Decne. のシノニムとされている）」の記述は，筆者らの不注意による誤記であるので削除する．ご指摘いただいた松尾照男氏（佐世保市）に深謝する．

（鈴木邦雄　939-0364 射水市南太閤山14-35）